山形・平形遺跡

1 所在地　山形県東田川郡藤島町平形

2 調査期間　一九七七年（昭52）四月～一〇月…第六次調査

3 発掘機関　山形県教育委員会

4 調査担当者　佐藤庄一

5 遺跡の種類　集落跡

6 遺跡の年代　平安時代後半

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

平形遺跡は、出羽国当初の国府所在地と考えられていたところである。この地域内で、計七次にわたる発掘調査が実施されてきたが、奈良時代にまで遡る遺物は未だ発見されておらず、むしろ平安時代以降の遺物が数多く見られるようである。

木簡は第六次調査で、調査区の南端、SE2井戸跡から一点出土している。SE2は直径約一・六m、深さ約二mの掘方の中に七段の蒸籠組みの井戸枠を拵えたもので、ここからは土器が主に出土しており、なかには「阿」と墨書された赤色土器もあった。調査段階では、当該地区は平安時代後半の集落跡と考えられている。

8 木簡の内容

SE2から出土した一点の木簡は現存長一〇・二cm、幅〇・五cmを測るが、細く割られたうえ、角を削られており、判読は不可能である。

9 関係文献

山形県教育委員会　「平形遺跡第六次発掘調査・現地説明会資料」　一九七七年

（尾形興典）

韓国慶州市にある、新羅時代の宮城の苑池〝雁鴨池〟発掘の調査が、一九七五年から二年余にわたって行われていたが、その発掘報告書が、早くも昨年末に同国文化財管理局から刊行された。図版篇ともに二冊からなる大冊であるが、なかに八世紀代の木簡が四十七点含まれているのは注目される。「天宝十載」「宝応四年」等中国紀年をもつもののほか干支年のものがあり、また付札の切り込み状のつくり方が、居延漢簡の付札に似ているのは興味深い。

（編集子）